

アムールの風

正統右翼の論理

第18回
田中健之
(黒龍會会長)

歴史的再考察から見える歪んだ世界秩序

——活動を通して習得した——
中国語とロシア語——

ところで余談ですが、私が今日、中国語が出来るようになったのは、中国の民主化運動の活動のおかげです。如何に上手に中国人に化けるかが、活動の成否にかかっていたので、真剣に中国人らしい中国語の取得に努力しました。そのお陰で、私の中国語は山東訛りの中国語が話せるようになり、台湾へ行った時などは、台湾人から

「あなたは大陸のどこから来ましたか？」などと尋ねられます。外国語の修得は、机上ではなく常に実践です。私は中国人に化けるために、横浜中華街で、中国人留学生だと身分を偽装して、中華料理店でアルバイトをしたこともありました。

また中国人が経営する中華料理店に行った時も、自らを中国人に偽って注文をしたり、歌舞伎町の中華パブなどで中国人と称して、一切日本語を使わず、中国語のカラオケ以外の歌を歌わなかったりと徹底的に中国人になる訓練とテストを自分に課しました。

音楽や歌から外国語を学ぶと大変に覚えやすく便利で

す。また、映画を見る、ラジオを流し続けることも語学を独学するための必要アイテムです。

ロシア語の場合は、文法が極めて難しいので、私の場合はロシアン・ポップスとロシア語のラジオ放送を流し放しにして、言葉の意味よりも発音とアクセント、言い回しを覚えた後に、日本語の意味を後から知るようになりました。そうすることで、発音とアクセントと文法が一つの歌として自然に頭に入り、単語量も一挙に増やすことができました。

中国語の場合は、中国語の字幕入りの中国語の歌や中国語の字幕入りの中国映画を繰り返し見て、漢字の読み方とアクセント、それに意味を一挙に覚えた上で、それを口ずさんで口に馴らし、街で見かけた日本語の看板に書かれた漢字を中国語読みで口ずさんで歩きました。漢字の読み方に、「音読み」、「訓読み」、それに「中国語読み」を加えたのです。

つまり街で見かける漢字をすべて「中国語読み」とし、音読して歩きました。看板を口に出して中国読みにして歩く私の姿を見たすれ違った人々は、多分私のことを「頭がおかしな人」だと思ったことでしょう。

その甲斐があつてか、今日では中国人の考え方や風習

が自然に身に着くようになり、中国人の良き友人ができ、また中国ビジネスの役に立つようになりました。

また、中国語の取得方法を参考にすると他国の言語も同様に取得しやすくなります。私は同様の方法で、ロシア語や韓国語も習得することが出来ました。

言葉は常に使っていないと、話せなくなってしまう。折角習得した言葉が錆びつくことがないように、私は今日でもなお、中国人やロシア人、韓国人と会った時には、周囲の日本人から、たとえキザで嫌な奴だと思われようとも、対象とする外国人に対して気遅れすることなく、平然として、それぞれの国の言葉で話すようにしています。

それもなるべく初めて会う人や親しくない人と話すことが有効です。

何故ならば親しい人や友人は、多少発音やアクセントが悪く、文法が間違っていたとしても、こちらの意を汲んで理解をしてくれるので、発音やアクセント、文法をあえて直してくれません。つまり癖を聞き慣れているからです。

それが初めての人や親しくない人の場合には、発音やアクセント、文法の誤りがあつた場合には、「えっ」と言

われ、改めて発音やアクセントや文法に気をつけて話すことになりました。

それで上手く通じた場合にはよいのですが、通じなかった場合には、相手は「何？」と聞き返してきます。それでも懲りずに再度、発音、アクセント、文法に注意してその言葉に挑戦しますが、そこでやっと通じた場合には、自分に課したテストは一応、及第として、その言葉の発音、アクセント、文法を今後は正確に話せるように、その言葉を注意点であることを記憶に留めておくようにします。

しかし、再度その言葉を挑戦して通じなかった場合には大抵、「日本語で話してください」と話し相手の外国人から言われます。

この時、相手にすかさず、「私はこういう意味のことを言ったのですが、どのように言いますか？ 教えてください」と言って、発音、アクセント、文法をその場で教えてもらうようにします。その時、紙にその単語と読み方、文章を書き留めるようにします。あとは、その日からその言葉を書いた紙を見ながら何度も口に出して練習をします。

そうやって発音、アクセント、そして文法を覚えたと思ったら、その言葉を使う国の友人に頼んで、問題があった言葉を使って、発音、アクセント、文法の正確さをテ

四月から五月にかけて起きたこれらの運動が、同年六月四日に生じた天安門事件の引き金となったのです。

この活動に参加、支援するために、中国民聯は劉曉波と王炳章および湯光中をアメリカから北京に帰国させることにしました。

劉曉波はアメリカから直接北京に向かい、その活動に参加することができましたが、東京経由で北京入りしようとした王炳章と湯光中は、日本航空が搭乗拒否したことで北京入りを果たすことはできませんでした。

当時、成田とチベット・ラサの路線の開設を計画していた日本航空に対して、中共政府が圧力をかけ、それに屈した日本航空は、二人の搭乗を拒否したものでした。

一方、中共外交部は日本の外務省に対し外交ルートを用いて、王炳章と湯光中の活動を阻止するように要請をしました。外務省はその要請に従って、二人の動きを封じ込めようと動いていました。

実は当時、王炳章と湯光中の受け入れを行ったのは私でした。

平成元（一九八九）年五月二日に来日した王炳章と湯光中の二人を中国民聯日本分部の黄興亜（高今航）、それに数人の日本人の仲間と共に私は成田空港に迎えに行きま

ストしてもらいます。そのテストにパスしたら、今度は、その言語を母国語とする初対面の人や親しくない人に対して、問題があった言葉を用いて話しかけてみます。

そこで、「えっ？」「何？」「日本語で話してください」と話し相手のネイティブの人に言われずにスムーズに会話が続けられたら、その言葉の試験に合格した、すなわちマスターしたことになります。

外国語を自由に話せるようになるためには、常に自分で、自分に課すテストが必要です。

——「中国の春」と天安門事件の思い出——

二〇一〇（平成二十二年）十月八日にノーベル平和賞を受賞した劉曉波は、中国民聯に参加していました。

一九八九（平成元）年四月十五日、中国の政治改革を唱えて、中共の保守派と八大元老に批判され、総書記を解任、失脚した胡耀邦が死去しました。

これを機に、胡耀邦追悼と民主化を叫ぶ学生デモが勃発、激化する中、「五・四運動」の七十周年記念日にあたる五月四日には北京の学生、学者それに市民十万人がデモと集会を行ったのです。

した。

また別便で密かにニューヨークから中国民聯の創立者の一人で、大幹部の林樵清も来日しました。

空港に着くと、どこから情報を得たのか、千葉県警の警護課の私服警察官が我々に近づいて来て、「今日は外国の要人の来日同様にVIP警備をする」との申し出がありました。

その他、大勢の制服姿の警察官が現場を囲み、非常に物々しい光景に空港は包まれていました。

こうした雰囲気の中、私は胸中密かに、「このまま上手く行けば、中国で民主革命が成功するかもしれない」と考えるようになっていました。

その一方では、親中共的な日本の当時の外交姿勢を考えた時、王炳章一行をどのように扱うのか甚だ予測はつかない状況下になりました。

空港の中で王炳章と湯光中が、VIPラウンジで記者会見を開き、黄興亜が通訳、私が司会を行いました。

新聞、週刊誌、テレビ局などの各社が集まり、カメラのフラッシュの閃光が容赦なく降りかかりました。

記者会見の席上、王炳章は、中国民聯を発展させて、中国共産党に反対する中国民主党を結党したことを報

告し、北京で行われている学生デモや抗議集会を支援するために中国に帰国することを明言しました。

記者会見の会場の中に紛れ込んでいた、中国民航の職員が、中国の情報機関員であったことから、記者会見の内容はタイムリーに大使館や中国本国に報告されていた。

私たちも当然、中国の特務の動向を警戒しており、彼らからの暗殺や、日本の外務省による圧力や妨害工作から二人を護るために工作を施す必要がありました。

私たちは、二人が四谷の「ホテル・ニューオオタニ」に宿泊するとマスコミに大々的に発表し、実際には赤坂の全日空ホテルに部屋をとりました。

成田空港から都内に向かいました。移動の手段には、防弾仕様の白いキャデラックのリムジンを使用しました。

この車は、長崎市に本部を置く、愛国団体「正氣塾」の若島征四郎塾長が所有するもので、私は同塾長に頼んで借りたものでした。運転と護衛は、正氣塾の幹部である田尻和美氏でした。

同氏は後に、現職の長崎市長でありながら、日本共産党と内通して、昭和天皇が御不例であられる最中に、「天皇の戦争責任」を議会で言明した、本島等市長(当時)に天

鎮であった頭山満の魂に触れることによって、私は王炳章と湯光中の壮拳の門出の祝いとしました。

翌日、初来日した王炳章、湯光中、林樵清の三人に、少しでも日本文化に触れてもらおうと思った私は、横浜の三溪園に彼らを案内しました。

三人は小型カメラで、美しい三溪園の庭園の写真を撮影しながらも、翌日の北京入りについての打ち合わせに余念がありませんでした。

そんな時、林樵清の下に劉曉波がニューヨークから無事に北京入りしたという消息がもたらされました。

彼らは「活動は成功した」と言って、安堵の表情を見せましたが、それも束の間、再び翌日の北京入りについて真剣に打ち合わせをしていました。

夕方、彼らの壮行会を横浜中華街の「四五六菜館」で開くことにしました。

五月三日のその日は、横浜開港記念みなと祭りに合わせて中国獅子舞が行われていました。採青と言われる中国獅子舞は、吉祥を願う厄払いのために、各店にて厄払いの舞をします。

店頭などに吊るされた紅袍(ポチ袋)などの御祝儀を啜えて、次の店に中国獅子舞は向かいます。

誅を下したことで、後に知られた人物です。

またアフガニスタンで、ムジャヒデンと共にソ連軍と戦った戦士奈良彰久氏、金権腐敗をした自民党政府に天誅を下すべく田中角栄邸に対して、数度にわたって火炎瓶を投擲した大西優氏らの猛者が、王炳章、湯光中兩名の護衛に当りました。

警察庁、警視庁の幹部を通して、その報告書から外務省が我々の情報を掴むことで、彼らが中共外交部の要請に従って、活動が妨害されることを防ぐために、警察の追尾、行確を振り切るべく、田尻氏は私たちが乗ったキャデラックを爆走させました。

この日は最早、王炳章、湯光中それに林樵清の三人の歓迎会を新宿の博多水炊きの料亭「玄海」で開きました。同店は、頭山満をはじめ東京で活動する玄洋社関係者が開店当初から懇意に出入りしている店で、玄洋社の二代目の社長箱田六輔と縁続きに当る矢野氏が経営する店です。

店の看板「玄海」の文字は頭山満の揮毫によるもので、同店の皿や徳利、杯には、「玄海」という頭山満の筆による文字と署名が焼きつけられています。また各個室の床の間には、頭山満の書軸が掛けられています。

孫文と辛亥革命など中華革命を支援し、日中友好の重

朝から晴天だったその日は、我々が中華街に到着すると、俄かに空が暗くなり、大粒の雨が降り出しました。暗雲の間には稲妻が走っています。

中国獅子舞の激しく鳴り響く太鼓と、爆竹の音に雷鳴が轟き、それらの激しい音が重なり合って、何とも革命前夜を思わせるような雰囲気でした。それはまるで、ニューヨークのチャイナ・タウンを拠点として活動する中華マフィアをモデルに制作された、ジョン・ローン(尊龍)主演のアメリカ映画『イヤー・オブ・ザ・ドラゴン』のオープニングの中国獅子舞のシーンを彷彿させる光景で、明日は革命の北京に向かう王炳章と湯光中の壮行会には、ピッタリな日和に私は感動、興奮したものです。

王炳章は、この日の記念に「驚雷」と、私に揮毫をしてくれました。獅子舞の爆竹と太鼓、それに轟く雷鳴は、中国に自由と民主をもたらす革命の「驚雷」であることに違いありません。私は王炳章の機転に改めて感動し、中国の革命を信じたものです。

——潰えた革命の夢——

その翌日、王炳章と湯光中の二人は、日本航空に搭乗

して北京入りするはずでした。

しかし、前述の如く、日本航空はすでに航空券を手にしていて二人の搭乗を拒否したのです。

仕方なく彼らは、他の航空会社の北京行き搭乗券を購入しようとしたのですが、どの航空会社も二人に搭乗券を販売してはくれませんでした。

それは中共外交部の要請によって、日本の外務省が各航空会社に対して、二人に航空券を販売しない旨の通達を出したためでした。

二日前には、「今日は外国の要人の来日同様にVIP警備をする」と言った千葉県警の警護課の代わりに、千葉県警の外事課員が無言でついて回りました。

北京入りできなかったことについての記者会見を催しましたが、来日当日のようにマスコミ各社が集まることはなく、狭い事務室のような場所を借りて、幹事社であった産経新聞社一社のみがインタビューするという、実に寂しい記者会見となりました。

その対応の変貌ぶりに私は、敗軍の将を見る思いがしました。王炳章と湯光中には、日本航空が北京行の航空券をニューヨーク行の航空券と交換したことで、彼らはその日の夕方、ニューヨークに帰って行きました。

天安門事件です。

この事件では、学生や市民たちの夥しい人数の人々が落命し、また負傷しました。人民解放軍兵士の中からも犠牲が出ました。

当時、北京市長だった陳希同は、一九八九(平成元)年六月三〇日付で『報告書』を著し、この中には、「騒動の当初から、国内外のさまざまな政治勢力が介入していた」として、中国民聯の胡平、陳軍、劉曉波の三人を名指して批判すると共に、「中国民主団結聯盟」の王炳章と湯光中の二人のリーダーも、急遽、ニューヨークから東京に飛び、北京に戻って騒動に直接介入しようとした」と記されています。

天安門事件後の平成五(一九九三年)、私は中国民主化運動の武装化路線の具体的な検討を模索して、ビルマ(ミャンマー)に渡り、カレン民族同盟と連絡を取り、カレン解放軍の視察を行いました。この武装化路線の検討は、王炳章の指示によるものでした。

二〇〇二(平成十四)年六月、ベトナムのクアンニン省において、王炳章、岳武、張琦の三人が、中共の特務機関によって拉致、誘拐され、広西チワン族自治区の方城港に移送されました。その後、王炳章は広東省で軟禁され、

それから間もない同年五月十五日、ソ連のミハイル・ゴルバチョフ大統領が訪中。学生や市民たちは共産主義と中国共産党に反対する意志を示すために、バリケードを築いて、ゴルバチョフ大統領を天安門広場に入ること阻止して、共産主義国家の象徴である同大統領を叩き出したのです。

天安門広場の様子が驚いたゴルバチョフ大統領は、一九八七(昭和六十二年)からソ連で始まった、ソ連の「立て替え立て直し」を意味するペレストロイカと共に、「情報公開」すなわちグラスノスチを加速させました。結果としてそれがソ連の生命取りとなり、ソ連は一九九一(平成三年)十二月に解体しました。

北京入りが成らず、ニューヨークに引き揚げて行く彼らを見送った私は、帰りの白い防弾仕様のキャデラックに一人身を沈めながら、この三日間の出来事を思い起していました。実に長いようで短い、短いようで長かった三日間で、疲れが一気に込み上げてきました。

その日から丁度一か月後の六月四日、人民の軍隊であるはずの人民解放軍が、天安門広場に突入し、武力をもって、天安門広場に陣取って中国の民主化、自由化を訴えていた、学生、学者、市民たちを鎮圧しました。第二次

他の二人は釈放されました。

二〇〇三(平成十五年)年二月十日、深圳の裁判所は、王炳章をスパイ活動とテロ組織の指導者として、国家転覆罪の有罪とし、終身刑の判決を下し、十八年の歳月が経った現在もなお、獄中に在ります。

王炳章が「テロ組織の指導者」だとされた理由の一つには、私たちによるカレン民族同盟との協議と視察を殊更に大げさに伝えた、中共の情報機関の存在があったからです。魏京生らの釈放運動が、アムネスティーなどの国際的な人権団体が行ったのに対して、王炳章の釈放運動はほとんど行われていません。

王炳章は獄中で著しく体調を崩した上、精神的にもかなりの負担が強いられているとも言われており、一刻も早い釈放が必要です。それは、古くから王炳章と縁があった者としての私の切なる願いでもあります。



田中 健之 たなか たけゆき

歴史作家、維新運動家。昭和38年11月、日生まれ、福岡市出身。安洋社初代社長、岡浩太郎の直系の曾孫で、黒龍會を創立した内田良平の血脈と系統を継承する親族。拓殖大学、白土文化研究所近現代研究センター委員研究員を経て、現在、ロシア科学アカデミー東洋学研究所分室、モスクワ市立教育大学外国語部委員研究員、日露歴史協会の長、2008年に黒龍會を再興し会長に就任。主な著書に『韓国に祀られる人々』、『昭和維新』、『北朝鮮の終焉』、『美は日本人が大好きなロシア人』、『横浜中華街』など。中央公論「正論」、『歴史群像』などの論議誌に多数執筆。